

問1 佐賀県で発見された、弥生時代の大規模な環濠集落の跡として知られる遺跡について述べた文として、適切なものはどれですか。（2016年 岐阜公立入試 類似）

1. 物見やぐらや竪穴住居が復元されており、銅鏡や銅鐸などの青銅器が出土している。
2. 縄文時代の集落跡であり、大型の竪穴住居やクリの栽培跡が確認されている。
3. 相沢忠洋によって発見された、日本に旧石器時代が存在したことを証明する遺跡である。
4. 戦国時代から江戸時代にかけて銀の採掘が行われた、世界遺産に登録されている遺跡である

問2 古代の東アジアにおいて、倭（日本）などの周辺諸国の首長や国王が、中国の皇帝に使者を送り、貢物を捧げた外交形式を何と呼びますか。この形式において、使者は中国の皇帝からその地域の支配権を認められ、称号や金印を授かることで、自らの権威を高めようとしていました。（2024年 宮崎公立入試 類似）

1. 朝貢
2. 通商
3. 冊封
4. 民間貿易

問3 弥生時代の遺跡からは、大陸から伝わった銅剣や銅矛などの青銅器が発見されることがあります。これらの青銅器の使われ方の特徴や変化について述べた文として、最も適切なものはどれですか。（2017年 岡山公立入試 類似）

1. 当初は武器として伝わったが、日本では次第に豊作を祈る祭祀や儀式のための宝物として使われるようになった。
2. 弥生時代には鉄器がまだ伝わっていなかったため、青銅器が唯一の金属製武器として実戦で使われ続けた。
3. 青銅器は非常に硬くて丈夫であったため、収穫した稲を加工するための農業用工具として普及した。
4. 各地の王が富を蓄えるための貨幣として使われ、和同開珎が作られるまで主要な流通手段となった。

問4 縄文時代末期から弥生時代にかけて、大陸から伝わった稲作がいち早く開始されたと考えられている、現在の福岡県や佐賀県を含む地域はどこですか。（2016年 奈良公立入試 類似）

1. 北九州
2. 近畿
3. 関東
4. 東北

問5 弥生文化を形成した「弥生人」の成り立ちや、その文化の特徴について説明したものとして正しいものはどれですか。（2022年 愛媛公立入試 類似）

1. 大陸からの渡来人と在来の人々が混ざり合うことで形成され、稲作を基礎とした定住社会を発展させた。
2. 縄文土器を使用し、弓矢を用いた狩猟や貝塚に見られる採集を中心とした、身分差のない平等な社会を維持した。
3. 遣隋使や遣唐使を通じて大陸の律令制度を積極的に学び、天皇を中心とした中央集権的な法治国家を築いた。
4. 武士が政治の実権を握り、幕府という組織を通じて全国の守護や地頭を統制する封建的な社会を構築した。

問6 3世紀の弥生時代、邪馬台国の女王である卑弥呼が行った外交について述べた文として、最も適切なものを選択してください。（2015年 佐賀公立入試 類似）

1. 中国の魏に使いを送り、「親魏倭王」の称号や金印、銅鏡などを授かった。
2. 中国の漢（後漢）に使いを送り、光武帝から「漢委奴国王」の金印を授かった。
3. 中国の宋（南朝）に使いを送り、朝鮮半島南部での軍事的な指揮権を認められた。
4. 中国の隋に小野妹子を遣隋使として派遣し、対等な外交関係を求めた。

問7 中国の歴史書には、紀元前1世紀頃から1世紀頃にかけての倭（日本）の様子が記されています。これらの記述についてまとめた次の説明のうち、最も適切なものはどれですか。（2023年 大分県公立入試 類似）

1. 『漢書』地理志には、倭人が100余りの国に分かれて生活し、定期的に朝鮮半島の楽浪郡へ使節を送っていたことが記されている。
2. 『後漢書』東夷伝には、卑弥呼が30余りの国を従え、魏の皇帝から「親魏倭王」の称号を授かったことが記されている。
3. 『漢書』地理志には、奴国の王が後漢の光武帝から金印を授かり、中国との交流を深めたことが記されている。
4. 『魏志』倭人伝には、倭の王が初めて中国の皇帝に朝貢し、大陸の進んだ青銅器文化を日本へ持ち帰ったことが記されている。

問8 弥生時代に大陸から稲作の技術とともに伝わった金属器のうち、銅とスズの合金で作られ、主に豊作を祈るなどの祭祀（祭り）の儀式に用いられた道具の総称を何というか。（2022年 島根公立入試 類似）

1. 青銅器
2. 鉄器
3. 土器
4. 打製石器

## 答え合わせ・解説

問1	<b>答え 1</b> 物見やぐらや竪穴住居が復元されており、銅鏡や銅鐸などの青銅器が出土している。	吉野ヶ里遺跡は佐賀県に位置する弥生時代の代表的な遺跡です。この遺跡では、防御のための堀を巡らせた環濠集落の跡が確認されており、復元された物見やぐらや、祭祀に使われたと考えられる銅鐸などの青銅器が出土しているのが特徴です。選択肢にある縄文時代の集落は三内丸山遺跡、旧石器時代の遺跡は岩宿遺跡、銀山は石見銀山遺跡を指しています。
問2	<b>答え 1</b> 朝貢	中国を中心とした国際秩序の中で、周辺諸国の君主が中国の皇帝に対して臣下の礼をとり、貢物を捧げる行為を指します。これにより、周辺諸国の君主は中国皇帝から国内の支配権を正当化する称号（官職や王号）を得ることができました。設問にある「称号や金印を授かること」は、この外交関係に伴う重要な政治的プロセスです。
問3	<b>答え 1</b> 当初は武器として伝わったが、日本では次第に豊作を祈る祭祀や儀式のための宝物として使われるようになった。	弥生時代には青銅器と鉄器がほぼ同時に伝わりました。実用的な武器や工具としては硬い鉄器が主に使われたのに対し、青銅器（銅剣・銅矛・銅鐸など）は、形が大型化・平坦化していくとともに、ムラの祭祀や祭りの際に権威を示したり神を祀ったりするための道具（祭器）としての性格を強めていきました。
問4	<b>答え 1</b> 北九州	朝鮮半島などの大陸に近い地理的条件を備えていた北九州は、新しい技術や文化の玄関口となりました。縄文時代末期には既にこの地域で水田稲作が行われていたことを示す遺跡が見つかっており、ここから日本列島の各地へと農耕文化が広がっていきました。
問5	<b>答え 1</b> 大陸からの渡来人と在来の人々が混ざり合うことで形成され、稲作を基礎とした定住社会を発展させた。	弥生時代は、ユーラシア大陸から九州北部などに渡来した人々と、日本列島の在来の人々が交流・混血することで「弥生人」としての特徴が形づくられた時期です。彼らがもたらした稲作技術は、それまでの狩猟・採集中心の生活を大きく変え、計画的な食料生産を可能にしました。これにより人口が増加し、階級社会や国家の形成へとつながる弥生文化が確立されました。
問6	<b>答え 1</b> 中国の魏に使いを送り、「親魏倭王」の称号や金印、銅鏡などを授かった。	3世紀、多くの小国が争っていた日本（倭）において、邪馬台国の卑弥呼は中国の魏に使いを送りました。このことは中国の歴史書『魏志』倭人伝に記されています。卑弥呼は魏の皇帝から「親魏倭王」の称号とともに、金印や多数の銅鏡（三角縁神獸鏡など）を授かることで、その権威を背景に国内の統治を安定させようしました。他の選択肢にある漢との外交は1世紀（奴国の王）、宋との外交は5世紀（倭の五王）、隋との外交は7世紀（聖徳太子ら）の出来事であり、時代が異なります。
問7	<b>答え 1</b> 『漢書』地理志には、倭人が100余りの国に分かれて生活し、定期的に朝鮮半島の楽浪郡へ使節を送っていたことが記されている。	紀元前1世紀頃の日本の様子は、前漢の歴史を記した『漢書』地理志に「倭人は100余りの国に分かれていた」と記録されています。一方、1世紀半ば（紀元57年）に奴国の王が金印を授かった記録は『後漢書』東夷伝に、3世紀の卑弥呼に関する記録は『魏志』倭人伝（『三国志』の一部）に記されており、書物と時代・内容を正しく区別する必要があります。
問8	<b>答え 1</b> 青銅器	弥生時代には、大陸から青銅器と鉄器がほぼ同時に伝来しました。青銅器は、その独特の光沢や希少性から、実用的な道具というよりも、村の祭礼や儀式で用いられる祭具としての性格を強く持っていました。代表的なものに銅鐸、銅剣、銅鏡などがあります。